

月刊

いじろのとも

第九卷

十一月号

汝のために生きよ

「我」のため

生きるいのちの

虚しさよ

「汝」のために

生きて輝け

業でなす悪

それぞれが

それぞれに

ごうをおい

それぞれの

おこないで

あくをなす

ひとのよの

かなしさよ

若者の夢

若者の

一途な夢の

すがすがし

前途に幸が

あれよと祈る

人生を考え直して

みたい人は（五八）

『正法眼蔵』解説（二）

今月号の話題に入る前に、先月号でミスがありましたので、そのことを訂正すると同時におわびいたします。一つは、六頁のはじめのところで、秋月氏の名前が龍のみになってしまいました。申し訳ありませんでした。空いている、その下に付くべき字は私のワープロにない漢字でしたので、同氏の著書からコピーをして、張り付けようと思っていて忘れ、そのまま印刷してしまいました。その字は、王偏に民という字が付いた字で「みん」とお読みするようです。お名前は「あきづき・りょうみん」と、表紙カバーの著者紹介に仮名がついていました。

もう一つは、四頁以降に出てきました「両肯」という言葉ですが、それは山内得立氏の『ロゴスとレンマ』では、「両是」となっています。意味は同じで、両方とも、全てを肯定する世界、全てを是とする世界、という意味です。

ところで、今月号の本题に入る前に、先月号を読んで難しいと言われる方が結構ありましたので、復習を兼ね

て、少し補足しておきたいと思います。

結論的に言いますと、道元が意図するところは、仏道の目指すものを理解させるための導入をはかることです。仏道の目指すものは、結局、前回出た言葉で言いますと、「豊儉（ほうけん）より跳出（ちようしゅつ）」させること、つまり、解脱（開悟）させることにあります。すが、そうするためには、この通常（世俗）の世界、つまり意識が働く世界（私の理論で言いますと 自我 人格（たましい）の働き、 認知 言語（あたま）の働き、 感覚 運動（からだ）の働き、 情動 感情（こころ）の働きの世界）を否定しなければなりません。

なぜなのでしょう。そこを理解して頂くのが、とても難しいようです。でも、めんどろな理屈をこねますが、投げ出さないで、少し付き合っ頂きたいと思えます。

私たちの住む、この現実の世界は、常識の通用する世界で、否定は否定であり、肯定は肯定である世界なのです。白と黒がハッキリ区別できる世界です。

しかし、この世界はどこまでも相対な世界なのです。移ろう世界です。仏教で言いますと、諸行無常の世界です。否定と肯定で言いますと、否定から肯定へ、肯定から否定へと運動する世界なのです。それは、存在するあらゆるものが、お互いに「あい対して」相互「依存」し

ているということです。仏教の言葉で言いますと、あらゆる存在物が縁起の世界に存在しているということです。

そういう世界は、明るいと思っただけ歩いてるつもりが、実は、暗いところだったり、まっすぐだと思っただけ曲がっていたりする世界です（例えば、地表は平たいと思っただけですが、じつは曲がっています）。もっと切実な問題で言いますと、善いこと、正しいことを為しているつもりで、悪いこと、邪なことを為している、といったことが起こる世界です（例えばかつて、アメリカ大統領のクリントン氏が、日本への原子爆弾投下を正当化したようなことです）。皆さんは、気付いておられないかもしれませんが、誰でもがこつした悪を、日常茶飯事になしているのです。それが、相対な世界の特徴なのです。ところが、私たちが、現実のこつという移ろう世界に住しよとしますと、私たちは、仏教が目指す（他のあらゆる宗教が目指す）真の幸せや真の安心に至ることはできません。

なぜなら、自分の幸せが、「他に依存」しているからです。最も切実な例で言いますと、私たち人間は、食べ物という「他」に依存しない限り、命の維持が困難です。自分は生きていたい（肯定したい）のに、生命法則に従

って死ななければならなりません（否定される）。そうなりますと、誰でもがとても不幸なことだと感じます。ですから、普通は、食物が無くなる（否定）といったことは、到底、肯定することはできません。ということは、人間が食べ物という他者に依存する限り、それが無くなることはあり得る（現実に地球の各地で飢え死にが起こっています）わけですから、人間には、真の幸せは来ないと言えるのです。これは、何も食べ物だけに限りません。他者からもらう愛や承認・支持、あるいは自分を持っている財産や名誉、あるいはもつと身近な肉親などを失うことにも当てはまります。

しかしいくら真の幸せが来ないと言われても、人間はこの相互に依存する世界から逃れることはできません。食べ物のお世話にならなければ、生きては行けません。し、財産や肉親を失えば不幸をかこつことになるのです。なのに、人間には、有り難いことに、他に依存していても（食べ物に依存していても）、真の幸せ、真の安心に達する道が用意されているのです。

ここがまた、前述の相対な世界に真実は存在しないこと以上に、とても理解して頂けないところなのです。それは、体験を通じてのみ理解できることだからです。ですから、この先は、私を信じていただく以外にない部分

だと言えます。道元がいうことを信じて、従う以外にない部分だと言えるのです。

真の幸せ、真の安心に達するためには、前に述べましたように、世俗の世界を否定しなければならぬのです。それは、肯定も否定も否定する絶対否定なのです。全てを捨てざる世界だといってもよいと思います。仏教で言いますと、「執着（執着）」を払拭（ふっしょく）する世界です。禅宗でいえば、「大死一番」という世界です。全てを捨てて身を投げ出すとき、そこに仏の手がすでに差し伸べられている世界なのです。

でも、私たち人間には、生命への強い執着がありますから、そうすることは、至難の技と言えます。特に、現代人のように、自分の欲望の多くが満たされる世の中に暮らしていますと、そう言われてもピンときません。欲望の満足を、真の安心や真の幸せと勘違いしているのです。

では、具体的にはどうすればよいのでしょうか。それにはいろいろの道がありますが、基本的には、聖者の教えにどこまでもしたがって（則って）生きていくことです。例えば、その教えとしては、釈尊が初期から解かれた八正道がありますし、後では六波羅蜜があります。六波羅蜜は、布施、持戒、忍辱（にんにく）、精

進、禪定、智慧、の六つです。この中の持戒では釈尊は五戒を説かれました。それは、不殺生（無暴力）、不偷盗（ふちゅうとう）、不邪淫、不妄語、不飲酒（ふおんじゅ）、の五つ戒律です。現代人はこの殆どが守られていません。

自分への執らわれを捨てて、ひたすら、こうした教えに則って生きていくとき、全てを否定したことになっているのです。

そうしているとき、実は、あらゆることを肯定する働きが、既にこのころの中に宿っているのです（宿っている仏が輝きだすといった方が正確です）。

たとえば、自分の死という人間にとつて避けえない、決定的な否定も、肯定できますし、自分の自由にならなかった生（どんな素質と環境に生まれか）も、肯定できるのです。

こうなりますと、もう自分のために生きる人生は、必要なくなってくるのです。あらゆる生活が他者のためのお布施になってくるのです。ということは、道元の言葉で言いますと、余技が必要なくなってくるということです。余技とは、自分のためにする、暇つぶし、趣味、気晴らし、などです。

でも、「華は愛惜に散り、草は棄嫌におふる」のです。

自作詩短歌等選

フリーの国

フリーセックスの国
アメリカで
大統領のみ
純潔を
求められても
ちゃんちゃらおかし
元来が
フリーの国の
アメリカで
フリーセックス
当たり前
アメリカが
世界に誇る
民主主義
行き着く先は
こんなものなの

通心不全

有名な
精神科医の
言うことには
家族メンバ―
お互いが
優しさ故に
お互いに
コミュニケーション
できないと
ばかもほどほどに
するがよい
愛を失い
信なくし
互いが疎になり
孤立して
こころ閉ざした
結果にすぎぬ

棟梁の人徳

棟梁と
なるべき人は
それぞれに
人徳そなえ
人をひっぱる

留守の間のさざんか

三年の
あるじの留守も
知らぬげに
美しくも咲く
さざんかの花

霧がとけて雲となり

遙かなる
山の頂き
立ちのぼる
霧ぞたなびき
雲にとけいる

我と景色と

雄大な
景色の中に
われ没す
我と景色と
景色と我と

自作随筆選

児童の虐待

毎日新聞の調べによりますと、昨年1月から今年9月までの間に、親などによる「虐待」が直接の原因で死亡した乳幼児・児童が、全国で五十七人に上ると報道していました（十月二十五日付け毎日新聞）。そして、その五十七人の被害者とその子らを死に至らしめた加害者の特徴や暴力の概略が表にされてきました。

その表のいちいちを読んでいくうち、最近の親はどうなっているのだろうか、と暗澹たる気持ちになってきました。

親たちの暴力のきつかけとなるものは、子どもにとっては当たり前のことなのです。例えば、なかなか泣き止まない、大小便のおもらしをする、おもちゃを片づけない、言うことをきかない、などです。親はそのため腹を立て、弱く、無抵抗な子どもを殴ったり、蹴ったり、壁にぶつけたり、窓から放り投げたりして、殺してしまっているのです。

新聞の解説は、諸外国では「子どもの権利条約」の締

結を機に憲法や法律を改正して、通告制度や親のケアの充実、虐待に対する重罰化が進められているとのことです。特に米国では医師や教師など専門職が通告を怠ると処罰され、資格がはく奪されることが「通報法」で定められている、と述べています。しかし、日本では対策が立ち遅れている、と指摘しています。

果たして、こうした対策で、虐待が減ったり、無くなったりするのでしょうか。確かに、ある程度は抑えることができるかもしれませんが、それはあくまで対症療法的と言えるもので、根本的な解決には至らないと思えます。

私は、こうした虐待は、親の愛の弱体化によると考えています。それは、私の理論で言いますと、自己の肥大とそれに伴う他己の萎縮です。意識水準で言いますと、自分を抑えて、他者をたてることができなくなっているということなのです。中国の価値では、それを仁と名づけていますが、それが失われて来ているということなのです。では、仁を育てればよいか、ということになりますが、そう簡単にはいきません。実は、仁を育てるためには、その基礎にあるものを育てなければならぬのです。

では、仁の基礎にあるものとは何なのでしょう。それは、意識の中にはありません。無意識の領域に属する

ことです。無意識に宿る「自己」の生命力と「他己」の如来蔵との統合をはからなければならぬのです。

そのためには、一旦「自己」を否定するもの（他者・死・災害・不幸など）を否定することは勿論ですが、自己が肯定するものも否定しなければなりません。それは、財産であり、名誉であり、肉親であり、自己の生命ですらあります。

ということは、意識にある全てのものを否定するということです。その中心は、自己への執着を捨てるということですが、でも、これはなかなかできることではありません。その方法が、瞑想であり、ヨーガであり、座禅であり、読経であり、唱名・唱題なのです。

でも、これができるためには、現代人のように自己に閉じていてはダメです。他者にこころを開いて、他者、特に聖人を信じなければなりません。そして、その人の教えを信じ、その教えの通りに精進し、修行に励まなければならぬのです。そうしないと、真の他者への愛も、自己のコントロールもできるようにはならないのです。

しかし、いま、日本人は多くは傲慢になって、他者、つまり、究極の絶対他者である神や仏を信じることができなくなっています。ますます、悪循環が進んでいくようです。どこまでいくのでしょうか。

山間地の農林業

山間地は、文字通り山が大部分で、耕地は少ないです。しかも、その少ない耕地は、急傾斜地が多いのです。

昔は、農作業の大部分は、平地でも山間地でもたいして変わりがなく、牛や馬の家畜と、家族の人力とで行われました。山間地は、急傾斜地ということで、多少、耕作や植え付け、収穫のしにくさというハンデはあったにしても、農作業そのものは、平地とそれほど変わりませんでした。

しかし、今や事情が全く異なってきました。今は、大部分の農作業が機械化されたからです。特に主食になる作物ではそうです。まず、耕作が耕運機やトラクターになりましたし、植え付けや収穫も機械化されています。

ところが、平地と違って、急傾斜地では、そうした機械は使えません。それらの機械を、たとえ上下方向には運転できるとしても、方向転換するときに、ひっくりかえってしまうからです。

また、昔は、普通の百姓なら田畑六〇七反歩も作つていれば、何とか食べていけましたが、いまでは、専業農家としては、その十倍は欲しいところです。そうなりま

すと、手作業や家畜にたよった農業では、とつてい追いつきません。また、山間地ではそんな広い耕地を確保することは、大変難しいことだと言えます。また、山間地に適した、大型機械では作れないような農産品も、価格が安くて引き合いませぬ。ですから、山間地の農業は専業では殆ど成り立たなくなってきたのです。

また、面積の大部分を占める山の木材は、いま、とても安くなっています。先日木材の仲介業者の方とお話をしましたが、ひとかかえ以上もあるつかという杉の木が、市場へ持って行って五千円ぐらいだ、と言われました。ということは、その程度の木では、ほとんど山での買取価格は付けられない、ということのようです。これでは、林業も成り立たなくなってきたと言えます。ということとは、山間部の人たちの所得は、極めて制限されてきている、ということ。何も山間地に限ったことではありませんが、特に山間地では、農業や林業を専業とする人たちと、サラリーマンとの所得格差は開くばかりだと言えるのです。

政府は、山間地に住む人たちの生活をどう保障しようとしているのでしょうか。まだまだ、日本の多くの百姓が山間地に住んでいます。こういう事情を反映して、山間部の耕作放棄はどんどん進んでいますし、多くの山

は荒れ放題になっています。しかも、そんなところで、農林業を営んでいるのは、若者ではなく、圧倒的に老人が多くなっています。

このままでは、山の生活は成り立たなくなっていくのではないのでしょうか。山の耕作地が失われ、山が荒れ放題になってしまつてよいのでしょうか。私は、それではいけないと思うのです。日本の農業と林業が滅んでいくことは困るからです。それは、人間が生きていくこと、そのことだからです。

では、この困難な事態を解決する道は、どこにあるのでしょうか。一つの道は、国家が山間地の耕作者に対して、直接に所得を保障することです。また山林についても、その所有者または管理者に山の手入れに応じて、所得を保障することだと思えます。しかし、この方法は、どこまでも便宜的です。

もっと根本的な解決方法としては、生産をあげるためには一定の土地や地域を不可欠とする、一次産業と呼ばれる農林業などの生産品は、基本的に輸出入を制限または禁止し、少なくとも国際的に一定地域ごとに自給することを原則にすることです。

それは、地球上の一定の面積（地域）で養える人間の数には限りがあるからです。地球全体で農林産品の地域

的増減を輸出入で調節することは、至難の業です。もし、自由に輸出入を認めますと、国際間の貧富の差はますます開き、いま日本で起こっていますように、一国の中の都市と農村のように、地域による分業が進み、所得の格差が生じるように思えるからです。貧富の差を拡大させていくことは、「他者の心を感じるころ」を本質とする人間のあり方に基本的に反しています。

また、日本のように農林業者の所得を保障しない、それを食いつぶしていくような政策を取りますと、その国の産業構造はどんどんと歪んでいきます。その一つの現れが、山間地の農林業の衰退に象徴されますように、人間の生活の基盤である「土（大地・自然）」との関わりを失っていくことだと言えます。そのことは、家庭の喪失、教育の喪失、人間形成・人間関係の歪みといった、人間精神の基本的なあり方にまで、多くの人は気付いていませんが、関わってくるのです。

さらに、食料の不足は人間の生死に直接影響してきます。このことは、養える人口をはるかに超えそうな、いま問題となっています、人口爆発を防ぐためにも必要な対策のように思えるのです。

もし、国内所得補償措置と国際間輸出入制限措置が可能なら、日本の農林業はかなり救われると思うのです。

釈尊のことば（七四）

法句経解説

第十九章 道を実践する人

（二五六） あらあらしく事がらを処理するからとて、公正な人ではない。賢明であつて、義と不義との両者を見きわめる人、

（二五七） 粗暴になることなく、きまりにしたがつて、公正なしかたで他人を導く人は、

正義を守る人であり、道を実践する人であり、聡明な人であるといわれる。

この一続きではあるが、二つに分けられている偈で求められている「人」は、公正な人、きまりに従う人、正義を守る人、道を実践する人、賢明・聡明な人です。ここに出てきます「公正」「きまり」「正義」「道」という言葉は、すべて、私の理論で言いますと、「他己」に属するものです。

私の理論で、他己が発達した人とは、他人に注意・関心を常に向けていて、こころから他人の痛みを共に痛み、他人の喜びを共に喜ぶことができる人、私の言葉で言い

ますと、「人の心を感じるこころ」を持った人であつて、しかも、誰が見てもあの人は人格者だと言われるように、人の期待や伝統・慣習や規則などに従つて行動することができる人だと言えます。

そのためには、実は、「自己」の情動（欲望・情緒・気分など）をよりよくコントロールしようとし、自分を知らうとひたすら見つめて真摯（しんし）に努力していかなければならないのです。

このように自己を見つめようと努力・精進することと、他者と協調して生きていこうとすることは、一見、矛盾していますが、でも、行き着く先は同じで、自己完成即他者奉仕なのです。

この偈にあります、公正な人、きまりに従う人、正義を守る人、道を実践する人が、すなわち、賢明な人であり、聡明な人でもあるのです。

現在、世界的に他己が萎縮し、自己が肥大していますので、大多数の人が、公正さ、きまり、正義、道などに従うのではなく、自己の情動に従つて、行動しています。ですから、この偈はまさに現代人のためにあるような偈です。でも、きっと大多数の人には受けられないのだと思います。それだけ他己萎縮と自己肥大が進み、受け入れる余地がなくなつて来ているのだと思うのです。

（二五八）多く説くからとて、そのゆえにかれが賢者なのではない。こころおだやかに、怨（うら）むことなく、恐れることのない人、かれこそ（賢者）と呼ばれる。
（二五九）多く説くからとて、そのゆえにかれが道を実践している人なのではない。たとい教えを聞くことが少なくとも、身をもつて真理を見る人、怠つて道からはずれることの無い人、かれこそ道を実践している人である。

この二つの偈は、共に「多く説くからとて」で始まっています。前者は、そうするからとて「賢者」ではない、と説き、後者は、そうするからとて「道を実践している人」ではない、と説いています。

現在、仏教ブームが起こっているようです。仏教書の出版もとても多いように思います。私も、古本屋さんでは必ず、宗教書のところを探しますが、新々宗教までを含めて、啓蒙的な本は限りがないほど出版されています。特売ものは、いま多くは百円ですが、そこにも宗教書が氾濫しています。

新宗教や新々宗教の教祖やその支持者はさておいて

も、宗教学者の中にさえ自分の宗教学の専門書は脇において、研究を怠っているのか、もっぱらお金儲けのためなのか、啓蒙書ばかりを書いていると思える人もいます。

まさに、この偈にありますように、「多く説くからとて」と言いたくなります。私も安いものを選んで、そうした啓蒙書も買ってきましたが、宗教学者のものでさえ、ほかばかりかしいと思えるものばかりです。

いま巻頭のシリーズで取り上げています道元の正法眼蔵の解説書にしても、ものすごい大分のもでもあります、それでさえ道元の真意を捉えているとは、とても思えません。

また、私は、必ずといってよいほど毎週、日曜、朝7時半から一時間、NHK教育テレビで「このころの時代 宗教と人生」という番組を見ます。そこでは、宗教学者を含めて宗教に関係のある人が、入れ代わり立ち代わり出演して、「多くを説きます」が、この人は間違いないこと（真理）を言っていると思える人は滅多にいません。

つまり、この偈にありますように、「賢者」であったり、「道を実践している人」とは、とても思われないのです。

賢者とは、偈にありますように、「こころおだやかに、

怨むことなく、恐れることのない人」ということです。

「こころおだやかに、怨むことがない」とは、自分（自我）の思うように自己の情動をコントロールできるということです。それは、また、他者の評判や承認や支持や気にして「恐れることがない」ということでもあるのです。

また、道を実践する人とは、「身をもって真理を見る人、怠つて道からはずれることの無い人」ということです。

「身をもって真理を見る」とは、とても難しいことです。いわゆる「あたま」で、いくら本を読み、いくら人の話を聞いても、悲しいかな、それで実践に役立つ真理を見ることはできないのです。「からだ」と「こころ」も一緒にした修行があるので、それが身をもって真理を見ることにつながっているのです。

また「怠つて道からはずれることの無い」とは、例えば、六波羅蜜を守ることです。多くの人は、自分のための人生を生きていますから、どうしても怠けたくなってきました。道元は余技をしてはならない、と厳しく怠けることをいっています、なかなか難しいことです。でも、難しいからこそ、いま自分が怠けていないかどうか、常に反省していかなければならないのです。

後記

一、サツマイモを十一月の初めに掘り終わり、一部は箱に詰めました。リンゴの空き段ボール箱に粗殻を入れて、その上にイモを入れ、それを粗殻でおおい、またその上にイモを入れ、という具合に交互にイモと粗殻を入れて、詰めました。来年の六月頃までは十分もつものと思います。また、昨年リンゴの発砲スチロール箱に段ボール箱と同様に詰めて失敗しましたので、今年は、粗殻を使わないで、箱の底に空気穴を開け、そのまま詰めます。実験です。

二、大学では、いま、大学院生も学部生も修士論文と卒業論文の執筆におお忙しです。私のゼミ生で、自閉症児の親の心理を研究している大学院生がいます。その研究結果が、私の理論を裏付ける、とても興味深いものですので、その一部を紹介させて頂きます。

三、それは、自閉症児をもつお母さんのストレスと生き方との関連についての研究です。私の作ったストレス尺度と私の「自己・他己双対理論」から開発された、「自己」に重きをおいて生きようとしているのか、それとも、「他己」を重視して生きようとしているかを測る尺度との関連を調べたところ、ストレスの高いお母さんは、自己の「欲望追求」尺度と「出世追求」尺度で高い得点を

とり、逆にストレスの低いお母さんは、「他者指向」尺度と「社会貢献」尺度で高い得点をとっていました。また、その人たちの夫の生き方尺度の得点も分析しましたが、その結果は、お母さんとほぼ同様の傾向でした。ただ、ストレスの低いお母さんの夫、つまりお父さんは、自らの生き方を見つめようとする「自己追求」尺度で高い得点をとっていました。つまり、出世や欲望よりも自己の生き方を重視している、強いお父さんと他己を重視して生きる、優しいお母さんとの組み合わせが、ストレスを低くしていると言えるのです。この結果は私の理論通りで、どここの家庭にも当てはまりそうに思えます。

月刊 こころのとも 第九卷 十一月号 (通巻 一七号)	平成十年十一月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしと</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

